

西歐文學評論論

ルソー及其文學

本問文庫

文庫 14

D 12

80

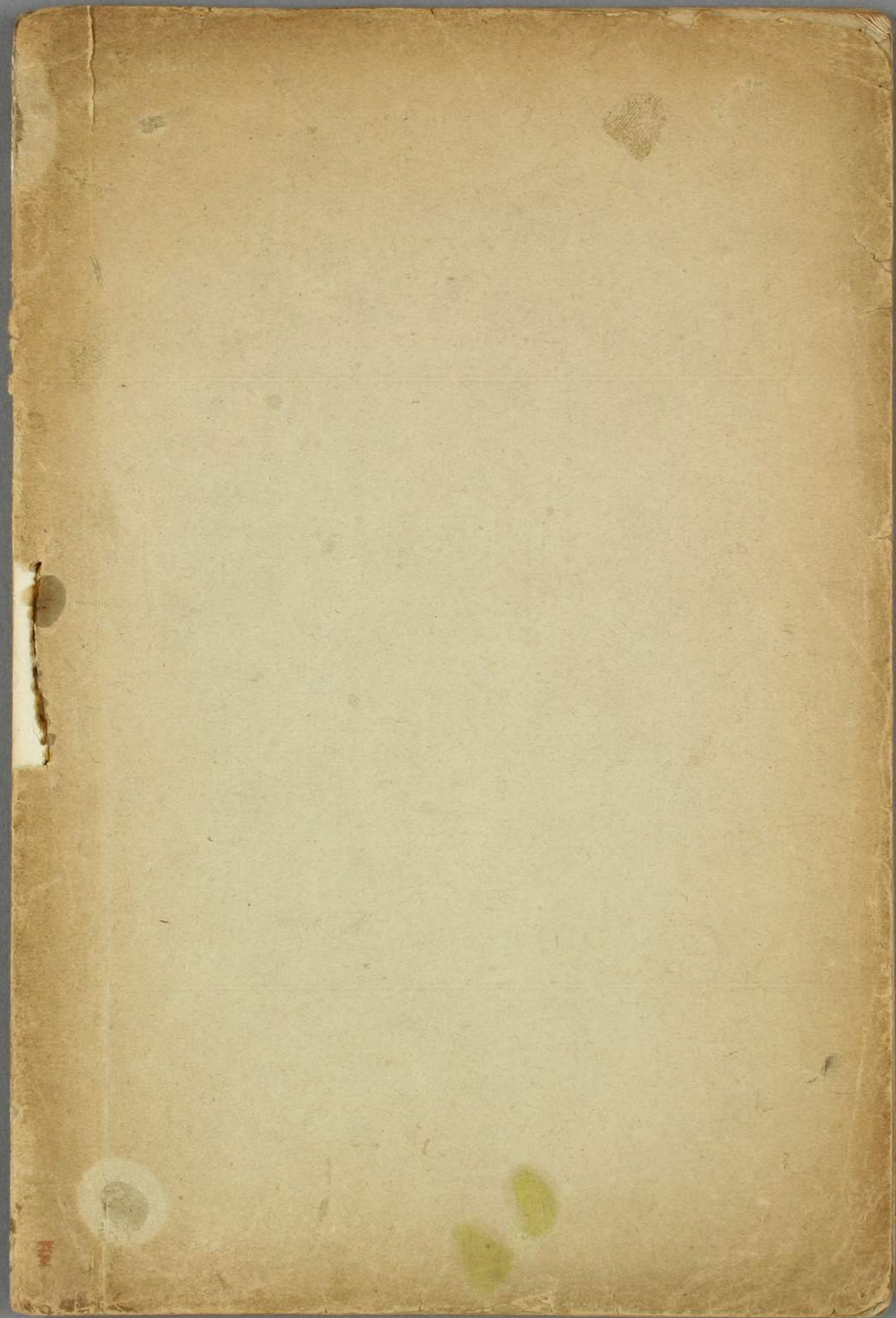
75

70

65

60





西歐文學評論論



ルーツー及其文學

文庫14
412

目次

○緒言	一
(上) ルーソーの傳記	三
(一) 幼時のルーソー	三
(二) 彫刻師の弟子としてのルーソー	四
(三) 不幸兒としてのルーソー	五
(四) 放浪者としてのルーソー	六
(五) 従僕としてのルーソー	七
(六) 神學生としてのルーソー	八
(七) 音樂師としてのルーソー	九

(八) 家庭教師としてのルーソー……………	一〇
(九) 風流社會のルーソー……………	一一
(十) 書記生としてのルーソー……………	一一
(十一) 艶福者としてのルーソー……………	一二
(十二) 良人としてのルーソー……………	一三
(十三) 親としてのルーソー……………	一四
(十四) ガデロの親友としてのルーソー……………	一四
(十五) 犬儒としてのルーソー……………	一五
(十六) 隱君子としてのルーソー……………	一六
(十七) 著作者としてのルーソー……………	一七
(十八) 晩年のルーソー……………	一八

(下) ルーソーの評論……………

(一) ルーソーの生涯……………	二〇
(二) ルーソーの不遇……………	二三
(三) ルーソーの性格……………	二四
(四) ルーソーの勢力……………	二四
(五) ルーソーの主義……………	二七
(六) ルーソーの哲學……………	二九
(七) ルーソーの文章……………	三〇
(八) ルーソーと其不平等論……………	三一
(九) ルーソーと其民約論……………	三一
(十) ルーソーと其ヘロイズ……………	三三

(十一) ルーソーと其教育論……………四

(十二) ルーソーと其懺悔録……………三七

○結 論……………三六

目次終

ルーソー及其文學

前田長太著

緒言

ジャンジャーク、ルーソーの名は一時邦人の間にも喧傳せられ、民約論の著者として、自由平等の主唱として誰知らぬ者あきに至れり、中には東洋のルーソーを以て自ら任ずる者すらありき、奇を逐ひ、新に奔るは人情の常あり、今やルーソーの名漸く忘却の墓に葬られ、東洋のルーソー其人も亦一壺の骨と化せり、然れども氏の謬論は其文辭と共に今仍世界を漫遊して、餘毒を現社會に遺留す、邦人の如きは其人物性行の如何を究めず、單に其文章の絢爛をのみ敬慕する者の如し、民約論の譯は既に明治十六年に出で、エミールの抄は明治三十二年に其初版を刊行して、同三十四年に至るまでの間に三版を重ねるに至れりと云ふ、余淺學菲才あれども聊か西歐文學を研鑽したる事あり、常に之を批判して以て其玉石を甄別せんことを志せども、諸事多忙、今日に至るまで其意を果す能はざりしを遺憾とす、然れども早晚始めざれば尙更其意を果す能はず、故に今茲に職務の寸隙を偷みて、所謂西歐文學評論の初頁を綴らんとす、之が先驅としてルーソーを撰びたるは、前述の如く氏の名最も人口に膾炙し、氏の論最も社會を盡

毒するが爲なり、然れども余は固より好んで人の惡を揚ぐるを欲するものにあらず、又議論の公平を保たんが爲には最も細心者スケルツェルの一人なり、故にルーソーの美は飽迄も美なりとし、惡は飽迄も惡なりとし、名文は名文、謬論は謬論として、務めて偏頗の筆法に出でざらんことを誓ふ者なり、讀者幸に焉を諒せよ。



(上) ルーソーの傳記

(一) 幼時のルーソー

氏は一千七百十二年六月廿八日を以て瑞西ジュネーヴに生る、父は時計匠、母は氏の生る、や間もなく死せり、既に母なし、其幼時の教育の放任せられたるや、毫も怪むに足るものなし、父は之を鍾愛せざるにあらざれども、其成長を氏の所謂天然状態に任せ置けり、然れども氏は年に似合はぬ熱心を以て、其母の遺せる幾多の小説を讀むを嗜み、又其叔母の歌へる歌曲を聽くを以て一種の樂とせり、氏の愛讀せる小説の中にはブルタルクの英雄傳もあり、佛國名家の著述文範等もありたれど、氏はブルタルクの英雄傳を反覆するを以て最も樂みとあし、古來の英傑豪漢の事績を回想しつゝ、子供心に自由と武勇を慕ふ熱情を迸出せしめぬ。

年甫めて八歳、父は争ひの事故ありて國を出でたれば、ボスセー村の牧師に寄托せられて其教育を受く、牧師は此の野生の子を教育するに最も意を用ひ、専心以て其精神と品性とを養成したれども、不幸にして一日誤て罪なきに氏を鞭ちたる事ありしかば、日頃より自由獨立を口にせる氏は忽ち茲に反抗の聲を揚ぐるに至れり、是より牧師の教養恩遇に報ふるに憤怨と執拗と怠惰とを以てし、萬方にすれども之を誘掖薰陶すること能はざりしかば、叔父は止むを得ず之を牧師の家より引取るに至りぬ。

氏は後に此時の事を述べて、悪に向ふ反動の端緒此より出づるが如く語れり、如何にも此の如き過擧は兒童の心を激發する動機とあるに相違なけれども、氏も亦其恩師に報ひたる過擧を悔ゆ可きに、毫も事茲に出でず、却て意氣軒昂、自由放縱なりしことを見て慶賀せるは、大なる誤ありと謂はざるべからず、幼時にして此の如くなる者は長じて處世の道を知らず、不幸に際しては直に怒り、逆境に陥りては忽ち訴ふるを常とす、就中天性過激、感情激發、想像熱中する者に至りては最も然りとす、而して氏は實に此の如き者にてありたり、宜かる哉終生不遇、到る處に熱罵を吹いて倒れたることや。

(二) 彫刻師の弟子としてのルーソー

氏は叔父の家に在りて三年間放縱不羈、氣隨氣儘の遊戯をなし、三年を経て修業の道に就けざるべからずとて、之を辨護士の書記に遣したれども、事其嗜好に適せず、暫時にして『我儘ある小僧』の評を冠せられて、放逐せられたり、放逐せらるゝ時『鑑を執て働かしむる外他の用に適せず』と云ふ宣告を受けたるが爲め、遂に之を彫刻師の弟子に遣したり、師は壓制過酷なる人にて弟子を遇すること非常に冷酷、屢々事故なきに弟子を虐待する事もあり、此人の殘忍酷薄はルーソーの性質に取りて前師(牧師)のそれより一層不祥不吉なる影響を及ぼしたり、氏の怠惰心は日に益す増長し、壓迫は反動を産み、虐遇は狡獪を生じ、師が其自由を束縛し、

遊樂を禁遏したるに對しては、忽ち茲に欺僞者とかりて巧に之を欺き、師が懲罰の爲に絶食を命ずることあれば、乍ち茲に窃盜犯となりて竊に師の物を盗み、爾來氏自らも白狀するが如く、盜癖深く其心に馴致して、容易に之を脱すること能はざりしと云ふ、然れども金錢に就ては極めて潔白なりと自畫自賛せり、氏が人の目を偷みて陰に行ひたる事の中にも、幸にして氏の墮落を豫防したる事は、幼時より馴致したる氏の讀書熱なり、師の目を偷みては隣人の書齋に往て讀書に耽けり、暫にして有らざる書を殘らず讀盡せり、書齋には眞面目なる書よりも、輕佻淫靡なる小説最も多きを占めたれども、之が讀書によりて利益せる所鮮からざりき、蓋し是が爲に知識を啓發し、時に高崇なる感情をも其心に喚起し、多少氏に缺陷せる教育を補ふに至りたればなり、然れども氏の惡戯、怠惰、放縱等日に益す増進しければ、殘酷なる師の憎惡を買ふこと一層甚しく、冷遇酷待の忍ぶ可からざるに至りて、氏も亦陰に其家を退るゝに決し、一日弟子等と共に市中に遊出でたる儘、遂に家に歸り來らざりき、師の家族も亦疾より之を嫌忌したれば、探ぬることもかく之を放棄し置きぬ、是より氏は世に出で、放浪の身となりたり。

(三) 不幸兒としてのルーソー

氏は時年十六歳、孤影孑々、天涯寄邊なく、轉々世海の波に漂されても、固より一定の教育を受けたる者にあらざれば、義務の觀念に於ても、處世の方法に就ても、將又人生の何物たるや

に就ても毫も精確なる思想なく、毫も確固たる主義なく、唯だ幾多の小説を讀みたる結果、空想に驅られ、幻影に欺かれ、多感の情と好奇の心、萬一を僥倖しつゝ、大膽にも行路難の人生を辿らんとせり。

氏は先づジュネーヴの附近に彷徨したり、近村の住寺等異宗者の改宗を希望せるや切、網を張つて彷徨者の之に入るを待つ、少壯ある放浪者乃ち先づコンシギヨンの住寺の手に入る、住寺之を遇すること厚く、諄々として新教の非を説て舊教に改宗を勧め、之をアンネシーの慈善家に遣はさんことに決す、是れ實に氏に取りて旅行の機會となり且其一時を凌ぐ好箇の道とありたるものなり、是に於て氏は紹介狀を得て同地の貴婦人所謂ワレンヌ夫の家に臻る、夫人深く之を愛し、交情怪む可きに至りて、土地の司教より之をチュレンの奉教志願院に遣はさんことを勧めらる、氏愛を割き涙を含んで夫人に別れたれども、途中アルプ山の絶勝を眺めて其悲の幾分を忘るゝことを得たり、然れども一たび志願院に入るや、宛然固圀の如き觀ありて、幾多の不幸兒と伍するを屑とせず、就中愚僧等の單調無味ある説教に飽き、咀呪の言を雨らして院を出づ。

(四) 放浪者としてのルーソー

然れども氏は毫も之を意とせず、却て年少の氣爲に益す鋭く、多感の性爲に益す激し、空漠

る想像と好奇の心又復た萬一を僥倖しつゝ、四方を漫遊す、チュレンを遍歴し、其附近を周遊したるとき、早や既に囊中無一物とあり、亦如何ともする能はざるに至る、是に於て平戸々に乞ふて、大膽にも彫刻師として雇はれんことを求む、氏は其實毫も斯業の心得あらざりき、商家の若婦人之を憐みて業を授く、同情の心遂に變じて戀愛となる、氏は茲に宛然情夫を氣取れども、不思議にも氣鋭の心一種の恐懼を藏し、未だ其情を打明す機會を得ざるに、不慮なる良人の歸宅に會して突然其家を追放せらる。

(五) 従僕としてのルーソー

是より益す生活問題に困難し、卑賤屈辱遂に人の従僕と爲らんことを欲し、輾轉困躓してウイリスリ伯爵夫人の家に入る、然るに幼時の盜癖尙未だ改まらず、伯爵夫人の死後、金色燦爛たる動帶を盗み、氏の行季の内に見出されたるも、氏は虚言以て罪を一少婢女に嫁し、茲に婢僕一場の争鬪を演じたる結果、二人共に放逐の命を蒙る、是に於て氏は又復た流浪の身となる。然るに天道人を殺さず、氏は又グヴォン伯の家に事ふるに至り、此時其盗心を抑制するを知り、且其利鋭の氣象を示したれば、大に此家の信任を得、後來有爲の家臣たらしめんが爲に、相當の教育を授け、伯の子グヴォン法師自ら之が教育の任に當れり、氏は恩師の道に従て學ぶこと頗る苦しく、獨學自修の法却て其知の鋭鋒を砥勵したりと雖、恩師の教訓亦全く空しか

らず、氏は之に依りて利益する所多かりき、氏の伊太利語を學び、羅甸語を始め、大家の書をも讀むに至りたるは、恩師の効其多きに居るなり、然れども氏は元より浪遊を好みたれば、チユレンを遍歴の際途中知己とありたるバツルと名くる年少ジユネーヴ人を訪問せしに、此の快氣なる年少徒歩長途の旅に就き、ジユネーヴを指して出發し、途中アルプ山の景勝を探ぐるの意を告げければ、ル氏同行の情に堪へず、恩主の之を止むるにも係らず、斷然辭し去つて其友と共に發足し、山紫水明の地を跋渉して、途次アンネシーに臻れば、ワレンヌ夫人幸に此地に在り、氏乃ち奔て夫人の許に到り、事の仔細と忘恩の所爲とを謝し、子供心と情夫の愛とを顯はして、平素の疎音無狀の赦免を乞ひたれば、赦免は案外易く與へられ、ワレンヌ夫人は倍舊の愛情を以て之を保護し、世評の難を排して、氏の生計の道定まるまで之を自邸に置きたり、然れども夫人が氏の爲に希望計畫したる事は、皆畫餅に歸して一も行はれざれば、知人來りて遂に氏を神學校に入れんことを勧めたり、氏はに於て乎神學生とある。

(六) 神學生としてのルーソー

夫人は知人の勸告によりて氏を神學校に入れ、將來司祭の教職に就けんと欲したれども、氏は永く此に繼續すること能はざりき、羅甸學と神學に心を委ぬること能はず、神學校の教師の氏に要求する所には毫も適せざれば、此にも亦不適任の者として追放せらるゝに至りたれども、

ワレンヌ夫人は尙失望せず、氏の聽覺甚だ精明にして、美聲善く歌ひ、且音樂を學ぶの心切なるを表明したるが故に、遂に之を殿堂音樂師の家に寄留せしむるに至れり。

(七) 音樂師としてのルーソー

斯の境遇は氏に取りて最も幸福なる生活を預測せしめたり、元來氏は音樂を好めるが故に、欣んで之を學びたるが上に、氏の慈母兼情婦とも稱す可きワレンヌ夫人の家は近隣に在りたるが故に、自由に其家に出入するを得たり、其師は音樂に取りては巧妙なる手腕を有したれども、其心は極めて善良にして俗に言ふお人良しにてありたり、去れば此の幸福なる生活は一年の間無事に送られたれども、一年を経て其師殿堂の教務員と隙あり、リオンに出發す、ワレンヌ夫人は氏に隨行を勧め、尙暫く師の教を受けしめんと欲せり、是に於て師弟相共にリオンを指して發足せしに、中途にして其師癲癩起り、突然路上に倒る、氏は之を見て驚愕の餘に出でたるものか、將又遠くワレンヌ夫人に離れて修業するのいやさに出でたるものかは知らざれども、師の路上に倒れたるを見捨て、卑怯にも直に遁走せんと欲せり、然れども流石に知覺を失へる者を其儘遺棄し往くに忍びずとや思ひけん、救助に駆け來れる人々を指圖して、旅館に待往かしめ、夫より直に逃遁し去れり、是れ實に氏の生涯の中最も羞耻なる忘恩の沙汰と謂はざるべからず、如何に強辨するも之を辨解する事は甚だ難からん、氏は此の如くにして、アンネシ

に歸れり、然るにワレンヌ夫人は其間にパリに往き既に同地には居らざりき、此の多感の夫
 人や義侠慈善の心に富みたれども、心事情に定まらず且曖昧なる生活を送れるが故に、ル氏が
 其師と出發せる以後の事は、毫も之を豫測するの明あらざりき、去れば氏は歸來又復た茲に其恩
 人を失ひたり、是より氏はローザンヌに臻り、未だ音樂の初歩だも知らざれども、自ら出で、
 音樂教師及び作曲師を以て任じたり、初めは人其自任の甚しきを以て之を信じたれども、公衆
 の前に之を試して大に失敗し、哄笑輕侮を以て迎へられたるが爲め、遂にネッシャテルドに移
 り、生徒を集めて、之に音樂を教へつゝ、自らも亦之を學びたり、爾來衣食に窮したる毎に、音
 樂を教へ、樂譜を寫して以て生計を營みたれども、斯道に成効するには至らざりき、時に世の樂
 譜を改良せんと欲し、時に音律書を著して以て其運を開かんと欲したれども、毎々失敗に終り
 たり。

(八) 家庭教師としてのルーソー

氏はリオンの法官マブリ氏の家に在り、其子弟の教員とされることあり、氏が此時の事を語
 れるを見るに、容易に信を置く能はざるものあり、身苟も教員とあり大家の子弟を預り、道義
 節制の原理を諸家の書中より汲取れる人にして、酒を盗みて陰に之を飲みたりとは、嗚呼吾人
 豈容易に之を信するを得んや、然れども氏は教員の身として此家に之ひ行ひたる事を自白せば、

事實あるに相違あし、然りと雖年を重ね、經驗を積み、反省自察の功によりて、道徳を嘉し、
 義務を愛し、名譽を重するの心は確に氏の胸中に油起發展したる事は争ふ可からず、氏も亦眞
 善美を認めざるにあらず、唯だ積年の習癖一朝にして改む可からざるは、敢て怪むに足らざる
 なり、然れども教員の職も亦氏にふさはしからず、其子弟の輕佻なりしと無能なりしは、氏を
 して益す之を厭はしめたり、故に幾許もなく之を辭してパリに往けり。

(九) 風流社會のルーソー

氏のパリに往くや、カステル僧の紹介によりブローユ、ブセンワール等の貴婦人社會に入り、
 風流、鄭重、頗る都門の風を學びたり、此時ジュバン夫人の邸宅は貴顯紳士、淑女令嬢及び著
 作家の諸紳士の相集まる所にして、フォントネル、ブフォン、ウオルテール等亦皆與れり、無名貧
 困のル氏は此の顯名の士の社會に入り、遠く一坐の末席に居たるや言を待たざれども、氏は默
 黙の裡にも竊に風流社會に注目し、其中に奢侈浮薄の風あるを見て太く都門の俗を嫌ひ、延て
 世間と同世紀とを厭惡するの情茲に其端緒を開きたり、嗚呼氏は由來交際家にはあらざりき。

(十) 書記生としてのルーソー

是に於て氏はブローユ夫人の周旋によりて佛國公使モンテーギユ侯の書記生となる、侯はウ
 ヌニースに駐在せしかば、氏は境遇の乍ち變れると、旅装の又新に整へらるゝ等の愉快と面

目とのありたるが爲め欣び勇んで此職に就けり、ウエニースに往きては無能怠慢勝なる公使に善く事へて、案外なる重任を賜すに至り、大に主の信用を得て、事務萬端を任せらるゝに及びければ、主人の信任と佛國政府との信任に望を囑して、功名富貴の門茲に開くるならんと信せり、然れども氏は公使の邸に在りて、遇せらるゝに其門地を以てせず、其勳功を以てせられんことを欲し、驕傲自尊の性候と相合はず、遂に怒つて去る、嗚呼氏は又茲にも安する能はざりしか。

(十一) 艶福者としてのルーソー

氏は四方に放浪して終生不遇の悲境を脱すること能はざりしが、女人社會には常に歓迎せられたるが如し、是れ其顔容の然らしめたるが爲か將又氏の多感の性能く婦人と投合したるが爲か、吾人は其何故なるかを知らずと雖、兎に角女人に愛せられたるは事實なり、初め一介の貧兒としてアンネシーに遣はさるゝや、ワレンヌ夫人に深く想はれたり、氏の同地に到れる時の意に以爲らく、慈善家なる婦人と云へば、定めし熱信なる否多少迷信に司配せられ居る一老婆からんと思ひきや、何ぞ圖らん二十八歳の美婦人の手に入らんとは、婦人は非常なる歡びを以て之を迎ひ、耳を傾けて備に氏の經歷を聞き、母子の情忽ち茲に變じて夫婦の如き關係とありたれば、信心の原因慈善の理由等は多く之に與らざりき、去れば氏も亦一見此の婦人を慕ひ恩愛と戀愛の兩情を以て之に事ひ、終生其側を去らざらんことを決したりしが、土地の司教の勸

告の爲め止むを得ずして夫婦的母子茲に涙を呑んで別るゝに至りたれども、其後屢々處々に際會して舊情を温むるの機會を得たることは前條述ぶる所に就て之を知るを得べし。

次に商家の若婦人に懸想せられたる事是亦前述の如し、氏も亦此時宛然夫婦氣取りにてありしが、氏の憶病あるが爲め未だ意中を明すに至らずして早や既に若婦人の良人に放逐の命を受けられたれば、幸にして否氏の爲には不幸にして深き交情に立至らずして止みぬ、嗚呼初めには婦人に想はれ、今又有夫の女人に慕はる、氏も亦艶福者と謂つ可し。

(十二) 良人としてのルーソー

氏佛國公使モンテイギユ侯と隙あり、ウエニースを去つてパリに歸るや暗黒なるコルヂユ街に於て殆ど下宿同然の生活を送りたりしが、此時同街に於て如何なる意氣の投合なるか、テレーズ、ルワヌールある卑賤の女を見初め、爾來正當の合婚式は擧げざれども、殆ど妻同然に視做し、其間に五人の子まで設けたれば、先づ氏を目して其良人の如く稱するも不可からんか、然れども正理の眼より視るときは、此時の結合の如きも、前來ワレンヌ夫人及び商家の若婦人との關係に照らして明なる如く、全く野合の夫婦なれば、良人と云ひ難きは勿論なり、唯氏は後日之を妻に決定したりと云ふ事と又氏の平素の行動とに徴して、余は姑く氏をテレーズある者の良人として觀察せんとす。

そもテレーズある女は人の眼には卑賤取るに足らずと思はれたれども、氏の眼には頗る美貌にして其性質も亦温從貞淑あるものと映じたり、蓼食ふ虫も好きくと観れば、容易く之が解釋を得べし、其實心淺く知乏しく、之に讀み書きを教ふる能はざるは勿論、一年の十二月をも知らず、時計の時をも見る能はざりしと云へば、其如何なる女ありしかは、略は推知するを得べし、氏は何故此の如き女を愛して一生の好伴侶となしたるかは、氏の奇行の外に吾人其理由を認むる能はざるあり、似た者夫婦の語は氏に中らざれども、其幾分の眞理を表明するが如し。

(十三) 親としてのルーソー

氏は親としては吾人如何にしても之に同情を表する能はず、吾人の推測或は中らざるかは知らざれども、氏は確に子孫の爲に結婚したる者にあらず、何と云へばテレーズの母とあるや、氏は其意志に逆ひて直に之を捨兒となしたり、是れ唯だ一回のみの過擧にあらず、後年又四人の子を設けたれども皆之を養育院に送りたり、氏の暴擧も罪す可しと雖、母の心情實に憫む可し、此の如き者にして晩年エミールを著し、兒童の教育を云々す、宛も彼の羅甸の文士セネカが慈善の名論を草するに黄金の机に於てせりと好箇の一幅對。

(十四) ザデロの親友としてのルーソー

氏はコルザユ街の下宿的生活の時代よりザデロと親交を結び、眠食を俱にせる關係より遂に莫逆の友とあり、其過激矯詭の議論等に於て往々其意見の相投合せるより、交情彌よ益す親密とあり、偶々デイジョンの學會大に學士の文章を天下に徴し、『學藝の風教に益あるや否や』を論せしむ、氏ザデロと市街を歩し、適々此報を得、徴に應じて其風教に益あるを論せんと欲せるに、ザ氏之を非として曰く、否、風教に害ある詭論を吐て、異を世に求めんに如かずと、氏乃ち躍然手を拍て曰く是ある哉と、此文一たび學會に出るや、果して卓論の稱を得、署して高等と爲す、是れを眞に氏の生涯の一轉期ありける、此時氏は病床に呻吟せり、ザデロ乃ち之を剗腕に付する勞を取りたり。

(十五) 犬儒としてのルーソー

氏は晩年に近づくに至りて、其言動も亦大に改善する所あるに至れり、一時會計吏にもなりたることあれども、眞理と道義に忠實あらんと欲せば、利益を犠牲に供せざる可からずとの持論にて、會計の利潤多き職をも圓滑に斷り、著作以て衣食の計を爲すに充分なれども、成る可く報酬の觀念を之にも期せざりしは、文士の天啓、天才の飛躍は利害の觀念の爲に大に減殺せらるると確認したる故あり、是より聖賢幸福の境に遊ばんが爲に、交際を絶ち、俗事を擲ち、衣は以て身を覆ふを以て足れりとし、食は以て口を糊するを以て足れりとするの主義を把り、古昔のデオケネスの如き犬儒的生活に入り、劍を投じ、時計を賣り、絹物一切を遺棄して以て、

其決意の堅固あると其心志の高崇なるを示さんと欲せり、然れども吾人は仔細に氏の心事を
 検査して、此の無慾恬淡の生活の中にも、往々人をして哄笑せしむる所ありたるは姑く措き、
 虚傲の念と奇を求むるの心との確に含蓄しありしを認むるに難からざるあり、古昔のデオゲネ
 スにして既に然りき、況や此似非デオゲネスに於てをや、吾人の見を以てせば、此時會計の職
 を辭するよりは、寧ろそれより得る収入を以て先づ第一其子を教育し、次に其大恩を受けしワ
 レヌス夫人（此時窮困に陥るれり）を救ふの急務ありしを認むるものあり。

(十六) 隠君子としてのルーソー

氏の犬儒的生涯は士君子よりも哄笑を以て迎ひられたり、眠食を俱にせる僚友までも氏の改
 善的言動を嘲笑するに至れり、氏は此等の嘲笑を見て憤慨に堪へず、之に加ふるに都門の人情
 風俗の直接氏の生涯に背反するを見て、厭惡の念一層甚しくあり、遂に斷然都門萬丈の塵を去り
 て、閑寂靜幽の境に入り、心靜に隠君子の道を學ばんことを期せり、エビネ夫人は氏の下宿的
 生活の時代より氏を知れるが故に、此志を聞いて己の土地のモンモレンシ林園の附近に在るもの
 を氏に與へたり、氏は茲に閑居靜養、隠君子の生を送れること一年有半に及ぶ、其間車服雜が
 ず、刀鋸加へず、裡亂黜陟亦與り知らず、眞に所謂小神仙にして逸民の高標なる可く思はれし
 に、惜い哉意馬心猿の爲に又々色情の虜となるに至れり、氏はエビネ夫人の家に屢々其小姑ヲ

ドット伯爵夫人に會見してより、同夫人を訪問する毎に、其親切其厚情に感ずるの餘り、氏
 の年來の弱質は遂に不幸なる現象を呈することとなりぬ、當時夫人はセン、ランベール氏に嫁
 し居たるものにて自由の身にはあらざりき、良人軍事の爲め不在なりしに當りて、氏其意中の
 人と爲らんとするが如きは、固より出來得べからざる事あり、去れば氏は夫人より眞摯ある友情
 の外に戀愛的心情を求むる能はざるを太く悲めり、而して他の一方よりは氏が同夫人に對する
 痴情の爲に其恩人エビネ夫人と不和を來したるに至りしかば、此事氏の爲に重ねの不幸と
 なりしと謂はざるべからず、然れども此迷の中にも氏の天才は天啓の動機を認めたり、其著新
 ヘロイズは往々同夫人を標本にして綴られたればあり、此傳は否此小説は殆ど全文氏の隱遁
 の境に於て草せられたりと云ふ、然れども是が爲に其恩人と隙ありて、其閑幽の地を去らざる
 可からざるに至りたるは、氏の爲に確に不幸ありしと謂はざるべからず、此時チデロとの交情
 も破れたりとせば、尙更然りとす、嗚呼林中の隠君子にして此の痴態と失態とを演ず、滑稽に
 むらすして何ぞや、勿論其罪氏のみに嫁す可からずとするも、氏毫も罪なしと云ふ事は吾人之
 を信ずる能はざるなり。

(十七) 著作者としてのルーソー

氏は是より先き再びチジョン學會の懸賞に應じて、人類不平等論を草し、頗る名聲を博した

れども、其後モンモレンシの某別業附近の臺榭に於て著したる民約論及教育論は、氏の著作中最も有名なるものと謂ふ可し、是より氏は續々書を著し、或は政體を論じ、或は宗教を談じ、或は音樂を語る等頗る多方面に涉りたれども、其議論多くは過激矯詭にして、且先輩學者と往々其意見を異にせるが故に、嘲謗四に起り、物議騒然、其書にして焼かれたるものあり、其身も亦危かりしかば、或は戸を閉ぢて敢て外出せず、或はアルメニア人の服を穿つて微行し、逃れて瑞西に入りては、又々佛國に還る等暫くも寧居する能はず、遂に英國に到り、有名なる哲學者ヒュムと共に談笑するに至りしが、懷疑論者と信仰宣者、保守主義の哲士と民約論の著者とは固より永く提携する能はざれば、一年にして友と隙あり又復た佛國に還れり、氏は著作者としては實に困難ある時世に在りたりと謂ふ可し。

(十八) 晩年のルーソー

氏は晩年に至り、少しく居に安するを得たれども、顧て其往時を追想すれば、屢々世人と怨を構へ、屢々友人と親を破り、恩主には放逐せられ、先輩には嘲笑せられ、然れども其志屈辱せられて益す鋭、其氣挫屈せられて益す激、常に以爲らく天下の人皆我を仇敵視すとて、快々として樂まず、其多感の性情と空妄の想像とは、世人の己を容れざる事を一層不幸視せしめ、殆ど發狂して死せり、時實に一千七百七十八年七月三日なり、其死に就きては諸説定まらず、

或は曰く、毒手に罹れりと、或は曰く單に病死せるありと、或は又曰く自戕せるに至れりと、最後の説最も眞に近きが如し、氏の行徑と又其失望に徴しても其然る可きを見るべきなり。



(下) ルーソーの評論

ルーソーの傳記は實に上段に述ぶるが如し、余は出來得るだけ事實を有りの儘に叙述せんことを務めたり、若し誤ありとせば、大方の叱正を待て改むるに吝ならず、今や是より氏の人物、性情、生活よりして其著作、其言論、其主義等に至るまで、縦横無盡に之を論評せんと欲す、但だ傳記餘り長きに失したるが爲め、本評論を成るべく簡單に約せざる可からざるの止むを得ざるに至りたるを遺憾とす。

(一) ルーソーの生涯

先づ氏の生涯に就き全般の評論を下さざるべからず、氏は家庭なく、朋友あく、又故郷なく、四方に放浪し、萬事に着手し、又萬民に容れられざりし者なりき、彼は中心之を憤り、反叫の言は續々として其口を衝て出で、革命の氣は鬱勃として其心に滿ち溢れ、驕傲自尊の性、獨立不羈の行、變じて殆ど狂亂者とあるに至れり、毎々社會に罪を嫁せり、然れども己れ罪なしとするか、往々當代の世紀を罵れり、然れども己れ罵らる可き所あしとするか、當代の文士墨客の輕佻浮薄なりしは外部の一現象のみ、是が爲に自家心中の和平幸福を攪亂するが如きは、狂者の爲にあらすして何ぞや、都門の驕奢宴遊の如き何れの國にか之なからん、是が爲に激して一時の隠君子を氣取るが如きは、笑止の至りからずや、嗚呼ルーソー、爾自らは國に忠なく、主に

義あく、妻に別なく、子に愛なく、朋友に信あく、所謂五倫の破壊者なり、論者爾を筆誅して惡國民、惡臣僕、惡良人、惡父、惡友と云ふも、恐くは爾之に答ふるの辭あからん、吾も亦爾の爲に辯護するの道あきを遺憾とす、爾の世人に容れられざるは、爾自ら之を容れざるが爲にはあらずや、爾の性は虚傲なり、一瑣事の之に觸るゝや、忽ち忿然として怒る、此の如くにして社會に容れられざる、何ぞ惟むに足らん、吾人必ずしも爾に屈從せよと教ふる者にあらず、然れども爾も亦一介の哲士あり、大に伸びんと欲せば、大に屈するの眞理を知らざるか、由來爾の模倣者は茲に誤れり、彼等は社會己の自由にならざるときは、直に立つて之を破壊せんとす、是れ爾と爾の弟子等の終生不遇ある所以なり、余は今一撮の土と化しせる爾に向て之を語るにあらず、今の世に生息する爾の門弟に向つて此眞理を説く、冀くは爾の生涯は今日の門弟に模倣の標本とならずして、反省の導火機とならんことを。

爾は此の如き心事を以て其才を磨き、其言論を吐けり、世と隔離、寂然獨居、義務を視る重荷の如く、愉快は之が遂行に在るを知らず、常に正理に背反する見地に立つて萬事を觀察せるが故に、天下の萬事皆其意に適せず、青色の眼鏡を執て天地を眺む、萬象皆青し、何ぞ怪むに足らん、社會を咀呪し、人類を咀呪し、人間制度一切のものを咀呪す、設令咀呪せらるゝ所之なきにあらずとするも、爾の觀察、爾の見地に於ても亦誤あしとするを得べけんや、爾の議論には

傾聽するに足るものなきにあらざるとするも、往々は毒言あり、膽汁の餘滴、嗚呼亦苦し。

爾は人をして道徳の境に遊ばしむるが爲に、人道を以てせずして、爾の所謂天然なるものを以てせんと欲せり、爾の所謂天然なるものは自由の發展、情慾の挑發、放縱不羈の心を指すなり、爾は自ら之が好個の標本を示したり、爾の口には道徳の言常に絶へず、然れども爾の行や如何、道徳の議論を喋々せること爾の如きはなし、然れども素行の修らざりしも亦爾の如きはなし、意馬心猿、色情の奴隸となり、感性の捕虜とあり、或は恩ある婦人に懸想し、或は有夫の婦人に戀慕し、或は旅亭の婢女に愛着す、之を是れ天性の發展、自由の飛躍と稱するか、噫。若夫れ爾の變通自在圓轉滑脱なるに至りては、吾人一驚を喫するより外なし、乍にして貧兒、乍にして臣僕、乍にして教員、乍にして盜賊、新教より轉じて舊教に入り、舊教より復た變じて新教に入り、忘恩者とあり、偽善者とあり、時に書記生、時に會計吏、或は音樂師とあり、或は著作者とあり、彫刻師の弟子より以來、晩年の隱君子に至るまで幾變遷、幾轉化するを知らず、圓轉滑脱の妙も亦是に至て極まれりと謂ふべし。

嗚呼是れ爾の一生、人生の事悲む可きもの多く、樂む可きもの少し、爾の生涯に於て最も然りとす、宣なる哉、爾が老來過ぎ越し方を顧みて、失望落魄の餘りに自ら不幸の最後を遂げたるをや、天殃は避く可し、自孽は避く可からず、善い哉言や。

論じ去り論じ來りて爰に到れば、爾の生涯には罰す可きもののみ多くして、賞す可きものは殆どゼロ、幸にして爾の言論、文章に於て取る可きものあり、余に若し閑あらば、譯して以て之を世に紹介すべし。

(二) ルーソーの不遇

古來有爲の才を抱懷して、一生不遇に終る者、其人に乏しからず、然れども吾人はルーソーの如く甚しき者を未曾て聞見せざるあり、傳記は備に其不幸、其難險を盡せり、此の如き生涯は固より心性の純潔と素行の一致を保つ一大障礙となるは言を待たざれども、知識の發達と才能の砥勵には與つて大に力あるものなり、氏の感情、氏の想像は是が爲に大に喚發興起され、氏の文章、氏の小説は是が爲に豊富なる材料を得たり、其の非運、其の失敗、其の蹉跎、其の旅行、其放浪等皆是れ氏の文才を發揮せしむる動機となり、基本となりたることは、争ふ可からざる事實なりとす、然れども余は是が爲に世人に氏の覆轍を踏まんことを勸むるものにあらず、但だ文才發揮の一點に取りては、單調の歴史よりも、變化多き事歴の効益多大なるを一言せるのみ、氏は此の一點に於て得る所多しと雖、道義の一點に至りては失ふ所大なり、氏が幼時の習癖を脱すること能はずして、改過遷善に一大困難を感じ、遂に道徳の君子とあるを得ざりしを見て之を知る可し。

(三) ルーソーの性格

人若しルーソーの人と爲り如何を問はば、一言以て之を蔽ふを得、曰く感情の人なりと、正理を以て之を律せんと欲するも得べからず、氏は感情を除て餘る所なし、感情は其性なり、感情は其叫びなり、感情は其生命なり、時に宗教的感情を起し、時に快樂の感情を起し、時に詩歌的感情を起し、其閑居を欲するも、其空想を逐ふて奔るも皆是れ感情なり、其文は其人あり、氏の言論は氏の性格を明に表證せり、其熱を吹ける議論、其毒を吐ける言論何れか是れ感情ならざらん、彼れの激したる、彼れの憤れる、最も其感情を顯はせり、感情の勢力や大なり、彼は感情に訴へ、感情に語れり、故に天下の萬衆を動せるなり、氏の弟子に至りても亦皆感情に動かされ、感情に司配せらる、此の意味に於てルーソーの弟子は、感情の捕虜なりと言ふも、誣言にあらじ。

(四) ルーソーの勢力

氏は當時の社會にも今日の社會にも一大勢力を占め居る事は、掩ふ可からざる事實あり、古來文士哲人多し、然れども氏の如く天下國家に影響を及ぼしたるの多きものを見ず、古往今來名聲の噴々たる哲學者、雖操觚家と雖、多くは一部の社會に於て權勢あり、多數人民に對しては風馬牛相及ばざるが如し、今試に十八世紀の著名ある哲士文人に就て語らんか、其相合した

るときには輿論を喚起するに頗る勢力ありたりと雖、個々別々にして之を考ふるときは、其權勢の及ぶ所甚だ狭少なり、モンテスキュは事績の原因に理論を加へて歴史の體を改變し、賢明なる政治の原理を指示して、法律を社會多様の利害に應用したるの効と勞とは實に偉大なりと謂はざるべからず、然れども氏の功勞は多數民人の記憶に存すると洵に鮮少なり、ブッパンは當代の博物學者として、就中斯學を文學的に紹介したる點に於て、誠に得難き人物ありとす、其觀察の精確なる、其人畜を畫く文筆の巧妙ある、古今之に企及し得る者稀なり、然れども其從事する所の物質的研究に偏せるが爲か、其事業の效果は枯乾して永く傳誦せられず、彼のウオルテールの後昆に對する事業は此等に比して一層廣大なる範圍と一層永續すべき性質を帶べども、其詩文は現世紀に何の利益する所かある、氏は殆ど社會の萬事を論じたれども、嘲笑的語氣と諷刺的言論に妙を得たりと云はる、の外他に稱す可き所なし、若夫れ其哲學的議論に至りては單だ僅に文筆の取る可きものあるのみ、真理に至りては殆どセロあり、之に反してルーソーは其天才も、其過擧も、其謬論も、其天啓も所謂其善惡眞僞共に社會の輿論、感情、嗜好、風俗、文學等を一變せるに於て、前數者の文人哲士の遠く及ばざる所なり、彼は直接には自己の文筆を以て、間接には其弟子を以て社會を己れの肖像に形りたりと云ふも、強ち過言にはあらざるなり、一介の人間にして此の如き權勢を有したる者は古來未だ曾見ざる所なり、其影響は社會

の下級にまで波及し、其書を讀まざる者と雖、否其書を讀む能はざる者と雖、其主義に依りて行ひ、其原理によりて動くを知る、所謂ルーソーの革命氣は兒童走卒に至るまで吹込まれたる、氏の議論を讀む能はずして、氏の思想によりて言動すとは、嗚呼亦其勢力も偉ある哉。

此勢力の原因する所は一にして足らざるべし、前述の感情は先づ其主因ならんか、氏の言論は一として感情的ならざるはあし、憤怒の情より發する言論、不平の情より出る言論は、到る處に反抗すべからざる引力を有するものなり、氏は愉快ある事を語るときにも、人の感に訴へ、平易なる真理を述るときにも、激して語る、是れ其勢力ある所以なり、氏は常に敵あきき敵を作りつゝ語る者なり、故に其口より出るもの一として過激矯詭の言をらざりしはなし、然れども其敵とする所往々其讀者なるも、人之を知る者少きは慨すべき哉。次に人を統御する術を知れり、人を愛憐しつゝ遂には己の議論に屈服するの止むを得ざるに至らしむ、氏の言にして若し眞理ならんか、其論理は到底反抗を容さず、極めて急迫なり、氏の頑然其理なき言を主張せんとするや、人を誘導して往々正道を逸し、理路を脱せしむるの秘訣を應用す、氏が普通の常識に背反する文章言議を草して、署されて高等とかりたるも皆此秘訣に由るなり。其次には氏の文辭の巧妙艷麗あると世に文筆に欺かるゝ者の多き等も確に之が一因たらん、今日に至りてもルーソーの文筆を悦ぶ者は多くあり、其危険なる謬論を指摘し得る者は洵に尠し、嗚呼是れ悲しむべき事ならずや、今の世ルーソーの虜となり、ルーソーの雛人形となれる者一に何ぞ多きや、聊かルーソーの勢力を叙するに當りて其原因の二三をも附記す。

(五) ルーソーの主義

氏は哲學社會に向つて其空想道德の主義所謂太初鴻荒の世に復歸せざる可からずと云ふ主義を提供したり、是が爲に野蠻時代の頌徳の辭を作り、同時代の質朴ある生涯を文明人士の師範として描出したたり、人間社會萬般の制度は學術技藝と同じく人心腐敗の原因ありと視做し、是が爲に人類平等論を草して、萬民同等とあらば此上なき幸福時代を現出すべしと主唱せり、家庭及び人倫の大道たる婚姻に對しては、天性發展、情慾逸出、自由結婚、野合夫婦等の理想を諄良質朴ある父母夫妻を假りて巧に描寫したり。

然り而して氏は大胆にも此等の改革案を一定不變の主義の如く確立せんことを務め、其基礎的原理として天下の民人に語りて曰く、嗚呼爾等苦みつゝある人民よ、記せよ、社會は爾等萬禍の唯一なる原因あるぞ、社會は不義の上に基立せられ、壓制の手に維持せらるゝ、社會を脱却せよ、天然に復歸せよ、其處に幸福は在り、其處に道德は存す、爾等其天然狀態に復歸するに至るまでは、凡て社會の爲す所、行ふ所に絶體的に反抗せよ、是れ善事あり、是れ美舉なり、壯絶愉絶云々と。

此等過激矯詭の議論は固より正人君子の真面目に論評すべきものにあらず、彼のウ・アルテールの如き惡漢と雖、氏の自然状態云々の議論に接して、『爾は人をして四足社會に歸せしめんと欲するか』と語れり、去れば余は今茲に真面目ある論評を加ふるを好まざれども、嘲弄は論評にあらざるが故に、極めて簡單に氏の原論を論破せんとす。

氏は社會を破却せんとす。然れども記せよ、人は社會的動物なり、別言せば、人は社會を構成するが爲に生存す、蓋し人と人との交際は其要求なり、其傾向なり、而して此要求傾向は第一一般人民の中に在り、第二天性に附隨して脱却する能はず、加梅、家庭と社會とは人間の知識道德の發達に必要缺く可からざるものなり、是れ哲學的議論、解説せば餘り長きに失せん。

氏は社會の弊害を云々す。然れども天下何物にか弊害かからん、弊害は弊害なり、之を以て社會を不必要視する能はざるものなり、壓制、奴隸、疾病、腐敗等を目して之を社會と爲す、何ぞ哲學眼に乏しきや、果然氏は哲學者と稱す可からず。

氏は平等を以て人類の幸福とす。然れども記せよ、不平等は第一人間の性質より必然に出づ、何となれば天性は子を親の下に、少年を老人の下に、弱者を強者の下に、愚者を知者の下に措くにあらずや、第二人間社會の成立より必至的に出づ、何となれば君臣、王民、上下の別なくんば社會は如何にして成立するを得んや、治者と被治者、命する者と服する者、到底之を

社會より省く能はず、省かば社會も倒る。

家庭及び婚姻に對する主義の如きは、氏の如き無家庭的生活をなし、氏の如き野合的夫婦者の理想とする所、正人君子は之を聞くども尙赤面す、世間此理想に欺かる、者あるは、氏の文筆巧に之に美服を装はしむればなり、眞理を裸体にせよ、一驚を喫せんなり。

若夫れ氏が道德には時にストイック主義を採り、時に道德自足の主義を採り、教育には消極主義、政治には民權主義、宗教には正理と自由との合調主義を採りて、其改革案を立てたれども、往々矯激の議論のみにして、到底實行に資する能はず、且常に眞偽相半ばし、頗る嚴密の批判を要す、蓋し氏は有名なる二心家にして、一心は往々感情に激し、一心は時々正理を語れる者、今一々之を評論するの違を、又實は之を評論する價なきものと認む。

(六) ルーソーの哲學

氏は哲學者としては三文の價値もなき者、前段改革案の言論に徴して明なり、氏に若し哲學主義ありとせば、架空主義即是れ。蓋し氏の感性と想像とは其心意内に不平均して、空想を實行主義として採らしむるに至れり、其軀軀困蹶の生涯と其憎怨疑懼の心情は人間と社會とを明に知るを得ざらしめたり、明確なる人生觀と社會觀をも有せずして改革案を立るが如きは笑止千萬ならずや、多少靈性主義を取りてウ・アルテル等と隔離したれども、是亦精確なる哲學主義

とするに足らず、氏が氣儘に宗教を作り、感情的自由飛躍を以て道德に達したるが如き、是れとても義務の觀念より出でたるものにあらざれば論するに足らず、要するに氏には哲學と稱すべき哲學は認め得られず。

(七) ルーソーの文章

氏は思索家として屢々理路を失したれども、文章家としては常に名聲を博したり、氏の文は苦心經營より得たる結果なり、氏自らも『紙上に筆する前五夜も六夜も吾頭腦の裡に繰返し繰返したる時あり』と語れり、氏の文は此の如く苦心慘憺の結果なりしと雖、氏には讀書熱、愛閑熱、音樂の感能、調和の要求、奇趣、奇想、奇行、及び發火し易き感情と抑へ難き自負心等ありて、此等は皆其天才と文才とを發揮し、彩色するを得たり。

氏は天然美に正直に心酔し、外界の事物に内心の感情を附して巧に之を描くの術を知れり、一片の花も、一樹の影も、一塊の土も氏が優美なる内心の記憶を附せられて描出せらるゝや、讀者之を讀んで快心に堪へざるものあり、氏の心鬱憂に暗まざるゝが如き時にさへも冷しき美觀を認め得ることあり、氏は時々妙文を綴り、陽春には鶯の聲を聞くが爲に二里の道をも遠しとせざりしと云ふ、然れども其筆の下に始終『モア(我)』の文字顯はれ出づるは、是れ其自負の發顯あり、又往々卑醜陋劣の情を憶面もかく露出するは、是れ後世青年の爲め不吉なる龜鑑

と云ふ可し、要するに氏の文は危險ある模範なり、玉石混同す。

氏の妙文として世に紹介すべきものは、『隱晦及田家の幸福』『旭日』『自殺』『決闘』『靈性不滅』『良心』『福音』『基督』等是なり、然れども吾人必ずしも其趣旨に於て皆賛するにあらず、唯其文章に於て敬服するのみ、氏の名文に至りては往々羅甸の文豪をも壓することあり、兎に角氏は醇乎として醇なる者にはあらざれども、先づ文章家として崇めらるゝに足るべき者なりと思惟す。

(八) ルーソーと其不平等論

『文藝影響論』の詭論たるや言論を費さずして明なれば、余は今之を論評せざるべし、氏は其次に『人類不平等の原因論』を著せり、是亦純然たる真理の議論にはあらず、詭論と小説の頗る多く之に混せるを見る、氏の所謂孤立時代、無垢時代、平等時代等と稱して、長き世紀を假定したるが如きは、是れ全く氏一個の空想に止まるものあり、氏自らも中心之を確信したるにあらず、若夫れ社會の本源を論じて、孤立時代の一人間の不吉なる謬想より出でたりと云ふが如きは、逆説辭論も亦太甚しと謂はざるべからず、社交的感能は天性要求の第一着なるものにして、社會は人生の發達に必要缺く可からざるもの、隨て人類搖盪の時に遡源せる事は、誰か之を認めざる者やある、蓋し其の不平等論なるものは、氏の憤激の餘に出でたるものにして、利己的富

豪に反對絶叫して、貧民の屈從を伸長せしめんとしたるは可あれども、弊害と社會其物とを同一視して、二者共に之を破壊せんとしたるは、人事の利害の眞理を認めざる者の議論と云はざるべからず。

(九) ルーソーと其民約論

氏は胸中に一大野心を包藏せしが故に、當代の哲學者と共に社會制度、宗教制度を飽迄も打撃し、之に代つて新社會を建設せんことを企圖したり、其著述の如きは其企圖の綱目と視て可なり、民約論は氏の政論を約言したるものにして、『人の生るゝや自由なり、然れども到る所純繼の裡に在り云々』の危険なる謬論より出發し、國家的萬般の義務を排斥し、世界を當初の黄金時代、氏の所謂自然状態に復歸せしめんと欲したり、是れ固より老莊の寓言と毫も異なる所なく、氏一個の空想より出でたるものゝみ、氏は是が爲めに民の主權を認め、之を治者に授托する事も又復び之を奪取すること、民の自由意志に在りとし、法律、契約等凡て皆民の利害如何に依りて何時にても之を廢立し得と云ふ事を主張し、到る處に自由と權利を吹込みて、義務、服従等に就ては一言も語らず、是れ實に其仇敵ウォルテールの所謂不可社交的ルーソーの不民約論に外ならず、然るに佛國の革命は此より其主義を吸取し、彼のマラの如きは傍聽者喝采の裡に之を朗讀解説したりと云ふ。

民約論は自由と民權の文字を標榜として出でたれども、之を實行せば古代の無道殘逆なる暴制よりも尙一層激甚なる壓制主義と奴隸主義とに歸するものなり、故に某哲士之を評して曰く『吾は民約論の形而上學よりも不吉ある謬論を呈出したる奴隸主義を知らず』と、氏は絶体的に原理を提供して、其中より幾何學的に嚴密なる結論を釣出し、モンテスキュの良法を太く排斥して、歴史をも、政治學をも、又行政法をも更に顧みず、勇進邁行直に自己の知見と異日世界を改革するの企圖とを表明せんと欲したり、然れども氏は兎に角此議論に奇想新態を附し、鋭鋒當る可からざる勢を示したり、其章句の簡明なる、其文章の蒼勁ある、其格言の利厚ある又其皮肉の言、理論の語、抽象的眞理等の處々に混入せるによりて、世人多く好んで之を讀むに至れり、一時は此書大に歡迎せられ、殆ど當時の聖書ゴゼの如く視做されたり。

然れども今や實際の經驗は明に此書の謬論を指摘し、現世紀は民の不可誤を承認せず、權利は主權者の正則たる施行によりて正當となり、民は單だ其承諾を以て之に効力を與へ、權の本源は依然天に出づとの議論最も其勢を占むるに至れども、吾邦にては又別に之が議論あり、余は異日某哲士の『主權論』を譯し、大に之を論せんと欲せば、今は單だ民約論の論評として一言茲に論及したるのみ。

(十) ルーソーと其ヘロイーズ

題して『新ヘロイズ』と云ふ、初は事實を正直に述べたるものなりしが、後に感情の描寫を挿入し、茲に變態を來したり、去れば事實は重要な部分たるを失ひ、主として心中の記事に歸するに至れり、是れ固より架空の小説談にして、取るに足らざるもの、前半は艶文と戀愛小説、後半は無神説と唯物論、著者は無信仰の人物を假り來りて良好の父、良好の夫、良好の國民として描出せんことを務めたるが如し、前後とも青年子弟の讀物としては危険なるものと云はざるべからず。

氏自ら此書に就き語りて曰く、『吾れ現世紀の風俗を見、慨然として此書を著せり』と云へり、如何にも氏の言の如く同世紀の風俗が新ヘロイズのに劣れりと云ふは、長大息すべき事象ありと云はざるべからず、然れども爲に新ヘロイズが家庭、婦人等の理想となるべきものにはあらず、氏自らも『凡て此書を讀む婦人は、腐敗せんことを好む者なり、否、早や既に腐敗せる者あり』と云へば、以て其價値を知る可し、余は此の如き書を評論するの筆を有せず。

(十一) ルーソーと其教育論

教育論、原名『エミール』は氏の天才と文筆の最も巧妙に發揮表顯せられたる書にして、氏の傑作と稱して可あり、氏の文章は常に苦心慘憺の餘に出づれども、此書に於てのみは流暢優美にして、殆ど自然の運筆に出でたるが如し、詭辨と奇矯の言は氏の脱す可からざる習癖あれど

も、此書中に在りてのみは、其筆力、其熱情共に過激矯詭に陥りたること比較的甚だ少し、然れども余は是が爲に同書は絶体的眞理を載せたる教育書として世に紹介するものにあらず、請ふ余をして其内容を語ると同時に、除るに之が論評を下さしめよ。

此書は教育的哲學的主義を包含し、全部五卷に分たれ、各卷兒童の發達期に應ず、『物皆造物主の手より出る時は善良なれども、一たび人間の手に入るや腐敗す』と云ふを以て、開卷第一の語とす、氏が教育の原理を基立せしめんと欲したるは實に此一句に在り、此書は原罪説を否定し、累代の經驗に背戻す、其標本となれる兒エミールは富貴の兒にして、氏は之を田園に教育せんと欲せるや可し、然れども之に境遇萬能力を附して、事實有り得べからざる境遇を前提せるは承認し難し、著者は此書に於て今まで行はれ來たれる教育の主義制度に飽迄も反抗せるの跡歴々として處々に認めらる。

同書の體育は種々の規定を要す、身體を鍛鍊して、寒暑に堪へしめ、萬苦を忍ばしめ、體操、修鍊等多く之あり、大體に於ては健全なる主義たるを失はず、然れども世の賢朋ある父母が著者の案出せる奇々怪々の方法をも悉く應用實施せんとするや否やは一の疑問あり、其德育は純然たる消極主義なり、教員は道德をも眞理をも教ふ可きにあらず、生徒には義務服従の語を知らしむべからず、凡ての行動唯だ『必然』に任すべきのみ、宗教、禮拜等をも教ふべからず、エミ

ルは十五歳に至るまで神を信ずるの能なき者あり、人之に敬神の道を教ふるは不可なり、時機來らば之に氏の所謂『信仰宣言』を聴かしむべしと、然れども氏は同宣言に於て靈性の存在、不滅、福音の神聖等を揚言しつゝ、基督教の土臺を傾倒して總ての宗教皆善と云ふ主義を採れり、隨て勢ひ無宗教主義に陥れり、若夫れ其知育に至りては、兒童が要求と好奇心と迫せられて、自ら學問に従事せんと欲するに至りて初めて開始すべしと云ふ、記憶の濫用を禁するや可し、暗誦を禁じ、歴史を禁じ、ラフォンテンの『ファブル』をも禁ずるに至りては、矯激の言と謂はざるべからず。

同書には教育上の眞理なきにしもあらざれども、謬論堆積の裡を切抜けてだも、其眞理を發掘せざるべからずと云ふ理由は、吾人之を認むる能はず、宗教と道義とは著者の筆に排せられて、虚偽と謬想とは流麗の筆によりて彩らる、例によりて命令的句調は處々に散見す、故に余は世人に此書を教育小説として讀むことも勸むる者にあらず、吾邦には多く此の如き危険の書のみ翻譯せらるゝは、慨す可き事あり。

余は此の如き教育小説を逐一詳論するの必要を見ず、然れども一言卑見を陳ぶれば、先づ第一ルーソーの如き父よりして子弟の教育を聴くは、頗る奇怪なりと云はざるべからず、彼は自己の子をも教育せず、殆ど捨兒同然になしたる者あり、彼にして面目あらば、焉ぞ之を語るを

得んや、勿論其教育なるものは、ルーソー流の教育には相違なけれども、之を以て世の教育に代へんとするが如きは、狂愚も亦太甚しと云はざるべからず。次に此書の教育主義は子弟に取りて實際施行す可からざるもの多し、子弟を其儘放棄し置きて一毫も之に教ふる所なく、子弟をして自ら學ばしむるに至るべしと云ふが如き、是れ果して出來得べき事なりとするか、若夫れ兒童には敬神の道を教ふべからず、神の名をも知らしむべからずと云ふが如き、頗る奇怪の説と云はざるべからず、其理由とする所は兒童の知識は未だ神と云ふ抽象的思想の高さに到達する迄發達せずと云ふに在れども、兒童は又兒童的に神を意識するを知らずとするか、氏の議論の如くんば、神の思想は兒童に取りて有害無益とするが如し、蓋し是を以て神の觀念をも省かんとするに在るあり、體育に就ては採用すべき所も尠からざれば、之を評論せざるべし、要するに、氏は兒童の品性を能く知りたる者にもあらざれば、自己の子に對する所爲も此書を綴る能はざらしむと云ふ事は姑く論せずとするも、此種の教育は古來の經驗にも、人間の性質にも、將又正理にも戻るもの、實際には取つて以て施行すべからざるものたるや明けし。

(十二) ルーソーと其懺悔録

氏の著に懺悔録あるものあり、氏は自ら過去にも之が類例なく將來にも之が類例をかるべき著作の如く誇稱すれども、過去に於て類例なきにあらず、オグスタヌスの懺悔録、カルダンの

懺悔録は疾くより既に世の知る所とされり、但だ此二者其性質を異にす、一は聖人の懺悔録にして、一は策士の懺悔録あり、後世に至りては懺悔録やうのもの雜然として世に出で、一々僕指に迫あらず、オグスタチヌスの懺悔は謙遜の叫びにして且神の讚美なり、罪人の追念たると同時に悔悟遷善者の祈禱あり、ルーソーの懺悔録は大に之と其趣を異にす、自家の方面よりせば、其虚傲の心を満快せらしめんとする叫びと云ふべく、他人の方面より見れば、其好奇心を悦ばざんとする罪惡談否醜猥談と云ふべし、オグスタチヌスは天に叫び、神に叫び、ルーソーは地に叫び、人に叫ぶ、前者には道義の高崇あるを見る可く、後者には心情の劣なるを見る可し、一見するときは罪業惡事を有りの儘白狀するが故に、極めて誠實らしく、眞率らしく思はるゝと雖、仔細に檢點すれば、其中に利己と虚傲は文學の衣を被りて潜伏す、嗚呼是れ誠心一片の叫びにはあらざるなり、其語句の如きは極めて自負的あり、曰く『我獨り吾心を知り、又人を知る云々』と、然れども其中に取て以て文範とすべき所あるは、没す可からざる所なりとす。

結 論

要するに、ルーソーは道德の見地より觀れば、一大講辨者にして、其謬論の危險ある、其影響の不吉なる、人の意想外に出づと云はざるべからず、文學の方面より考察すれば、確に文章家の一人たるを失はず、氏も亦此方面に於て頗る苦心せり、哲學者として視るときは、系統的學問を有したる者にあらずして、單だ古來の哲人大家の書に涉りたるが故に、兎に角哲學的思想を有したるには相違おけれども、哲學者と云ふ程の哲學者にあらざることとは明あり、然れども數理的頭腦と辨論者の才能は多少之ありたりと云はざるべからず。

若夫れ人物として之を視察せんか、心術陋劣、野心滿々、感情激甚、到底人の師範とある可き者にあらず、邦人にして之を崇拜し、之に私淑する者ありとせば、決して名譽の話にはあらざるあり、東洋のルーソー等の語を聞くときは、識者之を憫笑す、然らば何故世間之を一種の人物の如く思ふ者多きや、氏の奇行の爲か、氏の文章の爲か、氏の感情の爲か、氏の嘲罵の爲か、勿論此等も其遠因たるには相違おかるべけれども、氏の革命的思想と破壊的言論は、之を一種の人物と視做すに最も與つて力あるものと思考す、非耶。

由來吾邦の人々は意志健強、一心以て其生涯を始終する底の人物に感嘆を拂ふこと尠く、半世不遇、轆轤倫落、飽迄も當路者に反叫する者を見て感驚するの癖あり、故に此點より觀てルーソーに對せば、勿論之に同情を寄すべき所多からん、然れども是れ固より人物論の定規とすべきものにあらず。

他に又邦人の餘り冷熱を感せざるものあり、何ぞや、學者の女流社會に關係すると即是なり、效を携ふる事、妾を畜ふ事、女子を慕ひ慕はるゝ事等を視て以て是れ當然の事、怪むに足らず

とするの傾向あきか、英雄色を好む、老て益々壯あり、風流豪遊等の事は、毫も之を人物の瑕
瑾と視做さず、然れども泰西人士は最も茲に重きを措て論ず、此方面より觀察せば、ルーソー
は實に士君士の俱に共に齒するに足らざる人物あり。

ルーソー及其文學 畢

明治三十五年二月三日印刷
明治三十五年二月九日發行

定價 八 錢

著者兼
發行者

東京市京橋區明石町三十五番地

前田長太

印刷者

東京市京橋區築地一丁目十八番地

河本龜之助

印刷所

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

株式會社國光社印刷部

東京市神田區錦町一丁目十番地

發兌元

三才社

前田長太氏著

文學 羅甸 **哲人の人生觀**

同上

神學 斷片 **地獄**

同上

平民 哲學 **死**

同上

公教 演說 **救靈**

同上

**一年有半の哲學と
萬世不易の哲學**

定價 郵稅 二五 錢錢

定價 郵稅 二五 錢錢

定價 郵稅 二四 錢厘

定價 郵稅 二四 錢錢

定價 郵稅 二六 錢錢